論文の要約

論文題目：御伽草子における笛説話の形成
氏名：樋口千紘

御伽草子とは、室町期から江戸初期にかけて作られた短編物語の総称である。作品の数は五百編にものぼり、その形態は刊本、写本、絵巻、奈良絵本など様々である。御伽草子の呼称は、江戸中期までに大坂の書肆渋川清右衛門によって二十三編の作品が集められ、「御伽文庫」「御伽草子」と名付けて刊行されたことによる。本論文では、御伽草子に見られる笛説話に注目し、物語が笛説話をどのように扱い、また笛説話が物語にどのように機能するのかについて考察するものである。

本論文は、第一部「『横笛草紙』論」、第二部「義経物にみる笛説話」とし、『横笛草紙』と、『横笛草紙』に関連した笛説話を有する義経物を主に扱う。『横笛草紙』は、渋川版御伽草子二十三編にも収められ、諸本によって異同が大きい作品である。そこでまず、諸本研究を含めて本文を検討し、『横笛草紙』の特徴を明らかにした。その上で、『横笛草紙』にも含まれる笛説話が他の作品にも見られることから、それらを比較検討し、笛説話が中世の文芸にどのような作用を持つのかを考察した。第二部で扱う義経物は、『横笛草紙』の笛説話に深く関わるだけでなく、新たな笛説話の創出が見られるものである。よって、御伽草子の笛説話の形成に関わるとして、義経の笛について比較検討し、名笛譚について考察した。

具体的には、第一部では、『横笛草紙』の伝本の特徴をはじめとして高野山の地誌との関連などから本作品を概観した。その上で、本作品中に含まれる弘法大師の笛説話に注目し、御伽草子の笛説話形成について考察した。『横笛草紙』は、滝口入道と、横笛という女性との悲恋を描く作品である。同様の説話は『平家物語』にもあるが、『横笛草紙』とは性格が異なり、平維盛の出家を導く滝口入道の発心譚となっている。第一章「『横笛草紙』本文の形成―八宮本を中心に―」では、古写本の一つである清涼寺蔵絵巻（以下、清涼寺本と称す）を中心として他の伝本をもとに成立したと考えられる伝八宮良純親王筆写本（以下、八宮本と称す）に注目した。八宮本は、独自の本文を多く持つのみならず、現存する古写本各類に見られた独自本文を併せ持つという特異性がある。それは、八宮本が、数ある伝本のうちどれか一本を参考に筆写されたのではなく、様々な本文を持つ複数の古写本を参考にして、それらの本文を統合して成った可能性があることを示している。また、八宮本がかつて清涼寺本独自のものとされた横笛出生譚を含んでいることから、これら二本の横笛出生譚の異同に注目して、八宮本の本文がいかに生成されるのかについて考察した。第二章「名古屋大学日本文学研究室蔵『横笛草紙』の特徴」では、名古屋大学日本文学研究室蔵『横笛草紙』（以下、名大本と称す）が御伽草子本系統の本文に近いことから、同系統の諸本である元和古活字本、パリ本とで比較し、本文の検討を行った。名大本は同系統の諸本に比べて独自本文が多く、滝口と横笛をはじめ登場人物の心理描写が詳細である。他本に比べて簡潔に説明され

る本文を詳細に語るなどの特徴が見られる。それは、第一章で扱った八宮本のように、名大本もまた御伽草子の書写の際に、写本制作者により創意工夫が加えられて本文が生成される事例の一つであることを示している。第三章「『横笛草紙』と地誌」では、横笛の物語を載せる高野山の地誌『高野山通念集』『野山名霊集』『紀伊続風土記』に注目し、高野山という地域で語られる二人の物語を考察し、『横笛草紙』との関係ついて述べた。上記三つの地誌にある横笛の物語は、『平家物語』を引用し、その上で『平家物語』では語られない、横笛が鶯となって滝口のもとを訪れる鶯説話を載せる。鶯説話は、第一章で扱った八宮本や、高野山大円院に伝わる『鶯の弥陀の事』にも見られるものである。ただし、『鶯の弥陀の事』では、同寺院に伝わる「鶯の弥陀」の本尊伝説として語られており、八宮本とは内容が少し異なる。『横笛草紙』が、滝口が後に高野聖と呼ばれ尊ばれたことを記すことから、横笛の物語が高野山と深く関わることは明白であるが、加えて、高野聖による伝承の影響下にあった物語であることが考えられる。高野山の地誌『高野山通念集』『野山名霊集』『紀伊続風土記』をもとに高野山にある寺院や名跡の記述から、これら地誌と『横笛草紙』との関係を考察し、『横笛草紙』の多様性について論じた。第四章「『横笛草紙』弘法大師笛説話と義経物」では、古写本の一つである涼寺本に含まれる、横笛出生譚に注目した。横笛出生譚は、主人公横笛の父が深泥池の大蛇であるという話で、その中に、弘法大師が天竺に渡って三本の笛を得たとする弘法大師笛説話が含まれている。弘法大師笛説話が源義経の物語である『笛の巻』『御曹子島渡』などに見られることから、これら義経物の作品と『横笛草紙』とを比較し、横笛出生譚の持つ役割について考察した。清涼寺本『横笛草紙』に登場する笛の名は『平家物語』において以仁王や平敦盛の笛として名高い。しかし、横笛出生譚にある笛の由来は『平家物語』には依らず、義経物にある弘法大師の笛説話をもとに生成されている。それは、清涼寺本の難解な本文が義経物の『笛の巻』や『御曹子島渡』をもとに解読が可能となることから明らかである。さらに、『横笛草紙』が笛を介して義経物と関わるのには、物語における笛の効能が関係する。義経物において、義経の所持した弘法大師由来の笛は、義経の難を避け、霊異ある笛として描かれている。『横笛草紙』横笛出生譚に登場する笛もまた持ち主横笛の難を避け、霊異ある笛として強調される。このことから、義経物や『横笛草紙』横笛出生譚が、弘法大師の笛の威徳を強調するものであることを述べた。なお、高野山大円院に伝わる『鶯の弥陀の事』にも横笛の出生譚が含まれていることから、高野山の語り物も含めて考察した。

本論文の第二部は、「義経物にみる笛説話」と題して、源義経を主人公に据えて描かれる物語の、その中に登場する笛説話について整理したものである。義経物は判官物とも呼ばれ、源義経の活躍を描く作品群である。本論文では、義経の笛に銘がある『判官都ばなし』『みなづる』『御曹子島渡』をとりあげ、『義経記』や幸若舞曲『笛の巻』『烏帽子折』などを用いて義経の笛説話について考察する。第一章「義経物にみる名笛「蝉折」」では、義経物の中でも、殊に兵法獲得説話に注目する。兵法獲得説話は、義経が鬼一法眼のもとを訪れ、様々な困難を乗り越えて兵法を獲得するという話で、話の展開に義経の笛が関わる。義経の笛は

『義経記』に「漢竹の横笛」と呼ばれる笛が登場しているが、『御曹子島渡』や『浄瑠璃御前物語』などの作品では「大唐丸」「蝉折」といった銘がつけられている。「大唐丸」は義経物以外では見られない名である一方、「蝉折」は平家物語にも登場する著名な笛であり、しかもその持ち主は以仁王で知られている。義経物に見られる笛の異同と物語での描かれ方を比較し、「蝉折」が義経の笛として語られるようになっていく理由について考察する。第二章「『判官都ばなし』「村雨丸」説話の形成」では、兵法獲得説話の一つでもある『判官都ばなし』に登場する笛が「村雨丸」であり、他の義経物とは異なる笛説話を持つことに注目する。「村雨丸」の由来がどのように形成されているのか、義経物だけでなく『平家物語』や謡曲なども参考にして明らかにすることを試みたものである。

以上、第一部、第二部を通して、御伽草子に登場する笛説話には、様々な物語を繋ぎ合わせる機能があることを明らかにした。『横笛草紙』と義経物との関連から、それは御伽草子に限らず、謡曲や幸若舞曲といった芸能にも関わり、御伽草子がこれら芸能と深く関連することがうかがえる。また、互いに別の内容を持つ作品でも同じ銘の笛を登場させ、または由来を共有させることで、その笛が特異なものであることが強調される。さらに、笛説話が作品を横断することにより、笛説話の持つ機能が追加されていく面もあるだろう。そのようにして形成されていく笛説話には、笛の威徳を強調させる可能性を持つことも考えられる。笛説話の形成には、その持ち主だけでなく、笛がその持ち主の元に至るまでの経緯を含めて様々な人物が関わっていく。笛に、その持ち主や関わる人々の背景が加えられるのである。そうして、笛説話は、笛が個々に持つ物語を読者に想起させることが可能となり、物語を深める機能をも持つのであると結論づけた。